

---

# 人は性格によらない

こぐち

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

人は性格によらない

### 【NNコード】

NN8500NN

### 【作者名】

いぐち

### 【あらすじ】

ここはとある高等学校。まあ、偏差値はそこそこ高い進学校だ。そここの生徒である橋本哀史は、なにかとつつかつてくる校長がとてもなく苦手だった。そんな哀史はある日、校長の意外な姿を見てしまう。

俺は今、猛烈に怒っている。

クソッ、なんであんなやつが権力にぎりてんだよ！  
絶対におかしいだろ！

何故俺がこんなになつてゐるかと言つと、それは朝の集会までさかのぼる

がやがやといつるやい体育館。

今日は円に一度の集会の日だ。

めんどくさい、俺の感想はこんなのが、周りの奴らはさうは思つていい。何故だ？

眠た眼をこすりぐちぐち言いながらもとつあえず列に並ぶ。  
俺は一応比較的模範生なのだ。

朝七時半には必ず学校に行き、授業中は寝ないで真面目にノートを取る。少ししか問題を起こすこともしない。  
もちろん無遅刻無欠席の皆勤である。

そんな模範生な俺だが、ビリしてもこの集会だけは苦手だ。

「おはよー、諸君。今日も元気に学生しているかね？」

はつきり言おう。俺はこの校長が嫌いだ。

あの女性であるにもかかわらず男性のような話方をして、正確には知らないが結構な年齢のはずなのに、十台前半のような容姿をし

ている校長が嫌いだ。

理由は多々ある。

上げるとしたらきりがないがあえて一つ上げてみよ。

まず、なにかとつつかつてること。

早く来て教室で寝てると、わざわざ声をかけて俺の睡眠を妨害しやがる。朝の時間は貴重だつてのにさ。

しかもよく俺のクラスに視察に来る。

それだけなら別にかまわないけど、俺が一番後ろの席だからつて、ずっと俺のノートを覗き込んでくんなつての。

「我が校は文武両道をかかげているが、みんなよく頑張っている。先日行われた模試では……」

無駄に長い話め。

あんたの声が俺の集中力をガリガリ削つてきやがる。

ボイコットしてえ。マジだりい。

「…………だつた。えー、これで終わりにする」

「よつしゃ！ やつと終わつた」

「…………あー、橋本哀史<sup>はしもと あいじ</sup>。集会終了後に校長室にくるよつに

やつちまつた。

あまりにも嬉しかつたからつい声に出してしまつた。

あまりクスクス笑わないでください。

あと、「いいなあ」つて言つてている人が多数いるが、変わつて欲しかつたら変わつてやるぞ。

「やつと来たか。随分時間がかかったものだな？」

できる限りねばつたが、教師達に「おしゃべり」と言われてしおりがなく  
きてやつたんだ。

感謝はされど、文句を言われる筋合にはないぞ。

「なにか御用ですか？」

「なに、やつ急ぐな。次の授業までは十分に時間がある。そこにか  
けるといい」

できれば今すぐにでも帰りたいんだが。  
あんたと同じ空気を吸つてるだけでウザいのが伝わってきてたま  
つたものじゃない。  
その二ヤケ面やめろ。

「お茶とお菓子も出すよ」

おいおい、一人の生徒にそんな贔屓しかやつていいのか?  
これは問題だぞ。

まあ貰えるものは貰う主義の俺は当然のようになつた。  
仕方ないから座つてやつ。

よつかんと緑茶が出された。  
和菓子、いいよね。

「それじゃ話に入らうか」

「ううう

「口に物を入れながら話すのは行儀が悪いぞ」

すいません。

今の口に入っているから心の中で謝つておけばいいか。

「それにしても、君も素直じゃないな」

なにが？

そう思つてもまだ口に物が入つてるので話せません。  
俺が話さないからなのか、なかなか続きを言つてこない。  
もどかしい。

「君は私に会いたいが為に、毎度毎度あんな態度を取つていいのだ  
るの？」

「ブフカ　　ツ……」

なに言つてやがる」のクソ女郎。

そんな訳あつてたまるかつてんだ。 なんどわざわざウザい奴に会  
いに来なきやいけねえんだ。

「もうならうと云つてやれれば、私としてはそれと時間をあつ  
てやるの」……

「……むぐむぐ、ううくふ。変な」と言つてたじやねえよ。 できれ  
ばあなたとは一生関わりたくないな」

「なるほど。私に会わなければこんなにも恋焦がれる」とがなかつ

た、そうゆうことか。大丈夫だ、私ならすぐででも君を満足させられるぞ?」

「意味わかんねえこと言つてんじゃねえ!! 帰るつ!」

「あつ、待ちたまえ。ここでは嫌だったのなら、今夜うちに来ないかい?」

あー、あー。

後ろでなんか言つてるが俺には聞こえないなー。

とりあえず教室戻つて授業の用意しよ。

「うじて頭に戻る。

まったくもつて気持ち悪い。

ホントあいつの思考回路は理解できないわ。  
なにたくらんでだかわからない、あの狸ババアは絶対信用なんて  
しないぞ。

「おーっす、橋本。今日はなに言われたんだ?」

「別に。お前には関係ないだろ

「連れない」と言つなつてえ。校長先生様とのお話を聞かせておく  
れよー」

いかにも軽そうな話方をするこの男は長谷川海人はせがわ かいとといふ。  
いつも髪は寝癖をつけている眼鏡野郎だ。ちなみに活字中毒者。

今も辞書くらい分厚い本を携帯している変人。

そんなくせに俺よりも身長が約三十センチも高いときた。死ねばいいの!」。

「それにしても哀史つてばよくあんなことできるよなー。入学一ヶ月でもう先生達から問題児認識されてるよ」

「いっは野田恵果。のだけいか。

髪を肩まで伸ばしており、いわゆるセリロングの髪型をしている。いつも俺より身長が高い。ふざけんなと思つ。

「そんなわかるか。俺は真面目に授業受けているし、無遅刻無欠席。その上問題もちょっとしか起こしてないぞ」

「はい、ダウト。授業中によく落書きしてて校長先生に注意されてんじやん」

「違う! あればたまたま気まぐれで描いてたらあいつが来たんだ!

! いつもは真面目だ」

「またダウトだ。校長先生様が来る度、いい加減学習じろつてくらいい毎回注意されてるぞ」

「それに問題起つてるのであって絶対ちよつとじやなわよ。数も数えられないのね」

「少なくとも五十件は起つてゐよな」

途中から罵倒まで混じつてきてるぞ。

俺が黙つちやつてもお構いなしに俺のこと非難しまくつてゐし。

「お前ら、そんなに俺をいじめて楽しいか？」

一度聞いておかなければいけないと黙った。  
なんとなく、なんとなくだがここからサディストの匂いがした。

気のせいだつてことを願う。

「もううん」

「たりめーだる」

……もうダメだ。

俺はもうしばらく立ち直れない。

いつなつたら机に突つ伏して不貞寝してやる。

のそのそと自席へと歩こて倒れるように座った。

ああ……太陽の光が気持ちいい。やっぱ窓際つて最高だわ。

そしてそのまま眠りにつく。

はずだつたけど教師が来て起しこれてしまつた。

まあ、俺は眞面目に授業を受けるつもりだったから一度よかつたけどね！

今日の授業が全て終了した。

海人と恵果に挨拶をして、斜光が赤く輝いている中俺は帰路についた。

さて、今日のバーゲンはとっくに終わってしまったな。そこまで

金に困つてゐるわけぢやないから別にいいけど。

帰つたらなにしよう。

とりあえず予習と復習だろ。終わるのだいたい九時くらいになるからそこから飯食つて、風呂入つて……。

あとは趣味に没頭するか

おや？ 隨分かわいい少女がいるではないか。

でもあの茶髪ぐあい、俺の勘からいつてあの少女は絶対にかわい  
い。

その少女はなにやら重そーな荷物を持っていく。これは男として見逃せないぜ。

「お嬢さん、お困りのようですね」

む、後ろから声をかけてみたが、ちよつとマズったかも。

「まさか、驚いて飛び上がり持っていた荷物を落としたあげく落ちた場所が自分の足のつま先で痛さに悶える、なんてことが起こるなんて思わなかつたぞ」

「うー、いたいな。いたいなー。うー。うー。」

「よしよし。お兄さんが悪かつたから泣き止んで。お願ひ」

「じとまじ」近所からの田があるといじうどいの状況。絶対勘違いされる。

現にあわじじこぬおばさん達が「じうかをチラチラ見ながらなんか小声で話している」。

それにしても「ハーハー」なんて泣き方、変わってるね。

……こつこつ泣き止まない。それどころか泣き声が大きくなつてこる気がする。

しゃーねえ、じとま時は最終奥義に頼るとするか。

「せり、お嬢ちやん。お兄ちやんアメちゃんを持つてんんだけど、欲しい？」

「ハーハー！　ハーハー！　ハーハー！　あ…………欲しい」

萌えるつーてか萌えてるつー  
涙目で首をかしげたり、アメちゃんにしづづいて手を伸ばしたりする仕草がマジかわいいー！  
俺もう口っこんどこいや。

「はーいハーハー」

「ありがとー。…………ほむほむ、おこひーー！」

「…………。やっぱよかつた」

「の子、俺を殺しこきいやがる。」

今はかわうじて耐えてるが、油断すると鼻血による出血量で死

ぬ。

ぐつ、うつむけの校長がこんぐらこかわいければ毎日がお花畠の日々になるのにっ！

なんあんな狸ババアなんだあああーーー！

つつてもこんな容姿の大人なんてどこにもいねえか。いたらそれはそれで問題だ。

「ほむほむ。あ、そういうえばおにいひやん。わたひに用事があつたんれひよ？」

「…………はっ！ そそ、そうだよ。随分重そうな荷物だから、代わりに持つてあげようか？」

「ほんひょっ！？ れも、これすんごいおぼいよ」

「お兄さんにおまかせ…………」

アメちゃんが口の中のスペースをほととど使つてゐるからだひつ、実際に素晴らしい舌たらず語で話してくれてる。

地球に生まれてよかつた

！――！

俺は当初の予定通り少女の荷物を運ぶことが決定した。

俺の前をぴょこぴょこと歩き、先導する少女がとてもかあいいです。

「あのねあのね、それでね……」

「へー、やうなのが

「うふー！ そ、うなんだよー！」

先程から他愛もない話をしている。その楽しげな様子がハンパなくかわいい。

しつこと言われようが、俺はなんどでも言ひやー。

「この子かわいい！」

どうだ、まいったか。

「ね、ね、ね、ね、ね、ね、ねえーーー！」

「ん？ どうした？」

「うふが見えたからーーーまでいい！ ありがとうーーー！」

少女はまっさむうと俺が運んでいた荷物をひったくるようにして取つた。

やはり少女にとっては結構重いようでかなりふらついている。支えてやろうとしたが、ふらついた状態でどんどん走つて行つてしまい、あの子のだらう家に入つてしまつた。

しばらく俺は呆然としたね。

三十分は突つ立つてたんじやないかと思ひ。

だつて、あの少女の家、めちゃくちゃでかい豪邸だつたんだもの。

だが、そこまでだつたら五分くらいで我に返つていただろ。

問題はその直後に見たものだつたんだ。

どこからともなく現れたうちの学校の校長、通称狸ババア、もあの豪邸に入つて行つたんだ。  
さも当然のよつこや。

俺の目の前は真っ暗になつた.....。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8500z/>

---

人は性格によらない

2011年12月26日21時50分発行